

「語いもんそ」

Vol.13 平成22年4月10日発行

この通信誌は、宝山ホールで活動されているボランティアスタッフによって発行されています。

宝山プレゼンツ ウィーン交響楽団

ヨハン・シュトラウスアンサンブル

～ニューイヤーコンサート2010～

1月9日(土) 宝山ホール



1965年にウィーン交響楽団の首席メンバーによって結成されたヨハン・シュトラウスアンサンブルは世界中で1000公演以上を重ねてきました。今公演も小粋なサロン・コンサートの雰囲気ありのままに再現し、鹿児島のファンに19世紀ウィーンの薫りを届けてくれました。

お客様に感想をお聞きしました。

鹿児島県立松陽高校音楽科(クラリネット専攻)2年生の川口菜さんと酒井和華さんは、「すごく楽しそうに演奏していてとても心地よい音楽でした。研修旅行でウィーンに行ったのですがウィーン交響楽団の演奏を聴くことができなかったのが、今回聴くことができると嬉しかったです。また聴くことを楽しみにしています。ダンケシェーン。」と今日の感動を話して下さいました。お二人は2009年8月の吹奏楽九州大会(福岡)で松陽高校が金賞を獲得したときのメンバーです。



酒井和華さん(写真左)・川口菜さん(写真右)

研修しました。

1月8日に鹿児島県公立文化施設連絡協議会の舞台技術研修会に参加した沖永良部の知名町教育委員会事務局生涯学習課の石田梨沙さんは、1月9日宝山ホールの自主文化事業(ヨハン・シュトラウスアンサンブル ニューイヤーコンサート)を職場体験されました。この日は、公演ボランティアスタッフミーティングからチラシ折込・全体打合せ・担当別打合せ等全てに参加し、職務は場内整理及びドア管理を担当しました。



宝山ホール職員の宮脇さんと石田梨沙さん(写真右)



文化庁「地域文化芸術振興プラン」

かごしま伝統文化祭り

～いにしえから現代へ～

2月26日(金) 宝山ホール



先人たちの想いが込められている伝統芸能です。



鹿児島に古くから伝わる伝統文化の公演とあって、開場時間前から長蛇の列になりました。

第1部は、楠声会合唱団による鹿児島の唄（鹿児島のわらべ唄メドレー）で始まりました。



出演者のお一人にお聞きしました。

「私たち男声合唱団楠声会を幕開けのステージに立たせていただいたことを嬉しく思います。今回唄った薩摩兵児の唄・数え唄の二曲はよく耳にするものでしたが、鹿児島弁で歌う薩摩兵児の唄はかねては鹿児島弁を使っていながら、練習し始めのころはリズムにのれませんでした。練習を重ねていくうちに鹿児島弁の素朴な表現ができたように思います。数え唄は子供のころからよく歌っていたこともあってかリズム感もとれて歌いこむことができました。三邦丸は開聞地方の民謡で初めて聴く曲でした。男声合唱が好きで堪らない集まりの楠声会ですが、鹿児島の民謡を合唱する機会があまりなく、今回は民

謡の特徴である節回し等は気にせず力強く歌ったつもりです。いかがだったでしょうか。」と歌った感想を笑顔で話して下さいました。

公演の一部をご紹介します。

花笠の中打、白装束の平打が太鼓に合わせて勇壮に舞う「伊作太鼓踊り」



応永3年(1406年)伊作島津当主久義が田布施の二階堂氏を攻め落とした際に生まれたとされる踊りです。



奄美大島・加計呂麻島の大屯神社で催される祭事「諸鈍シバヤ」



天孫降臨伝説の地・霧島で約80年ぶりに復活した神舞「霧島神楽」



「客演」越中おわら風の盆

富山県の秋の風物詩で、優雅な踊りと哀愁漂う胡弓の音がお客様を魅了しました。



お客様に感想をお聞きしました。

濱田歩美さん（鹿児島市牟礼岡）

「鹿児島に住んでいても今まで知らなかった唄や知っていても歌詞の違う唄を聴くことができ楽しかった。また普段見ることのできない神楽や奄美の音楽を聴くことができ、あらためて鹿児島の文化の幅広さを実感しました。とても楽しい時間を過ごすことができました。」と感想を話して下さいました。



濱田歩美さん

進藤幸子さん（鹿児島市荒田）

「鹿児島に古くから伝わる唄や踊りの伝統文化まつり、第一部も二部もユーモアあり哀愁あり皆それぞれの持ち味があって、時の経つのも忘れ三時間近くがあつという間でした。特に平成9年に約80年ぶりに復活した伝統芸能霧島神楽が珍しくて新鮮でした。スサノオノミコトが八俣大蛇を退治するシーンは迫力があり息をのむ思いでした。それから鹿児島女子短大のハンヤ節・おはら節はきびきびと若さ溢れる踊りでなかなかのものでした。若い人たちが古い民謡を現代風にアレンジして伝統芸能を受け継いでくれることは頼もしい限りです。鹿児島の伝統芸能の素晴らしさを堪能した夜でした。」と話して下

さいました。

福元寿子さん（鹿児島市紫原）

「鹿児島の唄は懐かしくつい一緒に口ずさみ、またヤング踊り連のはちきれんばかりの若さに元気を貰いました。地方の踊りや行事などはテレビでしか見たことがなく感動し、又かごしま座敷唄では唄と踊りが華やかで楽しめました。」と感想を話して下さいました。



今回の公演ボランティアスタッフの方々

文化庁『地域文化芸術振興プラン』

NHK交響楽団

鹿児島公演

3月1日（月） 宝山ホール



NHK交響楽団の歴史は、1926年にプロ・オーケストラとして結成された新交響楽団に遡ります。今日に至るまで、カラヤン、アンセルメ、カイルベルト、マタチッチなど世界一流の指揮者を次々と招聘し、歴史的名演を残しています。近年は年間54回の定期公演をはじめ、全国各地で約120回の演奏活動を行っています。今回の鹿児島公演もクラシックファンでホールは満員になりました。

お客様に感想をお聞きしました。

渡辺 卓さん（鹿児島市西田）

「長い間楽しみにしていたコンサートです。早く

生まればと思ひN響の方々をじっくり見ていると現れました。指揮者とピアニストが二人とも若いなあと思いました。

いよいよ演奏が始まり最初はピアノコンチェルトだったのでピアノを集中して聴く形になりましたが、聴いているうちに昔夜も眠らずに聴いたルービンシュタイン、バックハウス、ホロヴィッツ、クライバーン等いろいろなピアニストが思い出され、(うまいなあ こんなに若いのに)指先を見ていると凄いテクニックで、見ていた私がまるでそれに取りつかれたように、体が前にせりだされたのに気づき坐り直しました。あとでデヤン・ラツィック氏のプロフィールを読み天才的なピアニストと知り納得した次第です。

そして大好きなチャイコフスキー第5番です、N響の演奏の素晴らしさは今まで幾度となく、テレビ・ラジオ等で聴いていましたが、やはり<生>です。生演奏の良さは全ての楽器、弦・金管・木管・打楽器の歪のない澄み切った音色です。それに印象的だったのが指揮者ミラノフ氏の見ているも愉快的な躍動的な指揮、またそれに従うN響の方々の演奏は全て良かった。

掻い摘むと第1楽章でのまず暗く重苦しいアンダンテから始まり、第2主題の高音弦のやさしさ、そしてまるでファンファーレのような金管群の盛り上がり、そして第2楽章に入り金管群の強烈な演奏、そのあと弦のピッチカートとボーイングに木管楽器が加わりなんと素晴らしく心の中で嬉しいと叫びました。第4楽章ではティンパニーの強烈な連打が最高に気に入って今でもその音は私の耳に残っています。

今回このコンサートに来て、指揮・演奏・全てを最高に楽しめて最近にないコンサートであったと思います。感動の一言に付きません。尚私達の希望ですが、クラシックのコンサートが少ないのでより多くクラシックの好きな人を増やし沢山の奏者に来てほしい。」と要望とともに今日の感動を熱く語って下さいました。



渡辺卓さん(写真右端)

鹿児島県立松陽高校音楽科3年生の野元理加さん
クラリネット専攻の野元理加さんとピアノ専攻の堀ノ内菜摘さんのお二人は、「とても力強くしかし繊細な音色で圧倒されました。初めの1音から引き込まれる演奏で感激しました。チャイコフスキーの5番を生で聴いたのは初めてでとても迫力があり、クラリネットの音色が印象的でした。」「ラフマニノフの2番はとても好きな曲なので楽しみにしていました。デヤン・ラツィックさんのピアノは、軽いタッチと指先の繊細なテクニックがすごかった。1音1音に魂がこもっていて深みのある音色で、大変心に響きました。私もそんな音を目指したいと思います。」とお二人が目指す音楽を含めて感想を話して下さいました。



野元理加さん(写真左)・堀ノ内菜摘さん(写真右)

《今回の取材担当》

撮影・取材記事 広報ボランティア 四十住孝行

宝山ホール広報ボランティア「語りもんそ」編集部

〒892-0816 鹿児島市山下町 5-3 宝山ホール

TEL099-223-4221 FAX099-223-2503